

大学生のためのキャリア教育の社会的意義

中 村 博

概要

大学生にとって何故、今、キャリア教育が必要とされるのか、複数の要因を考察し、卒業後一人前の社会人として活躍するには、大学時代にどのようなキャリアデザイン（人生設計）を構築する事が不可欠となるのか、これらの問題提起と解決策について私見を基に論じていきたい。

福山大学においては初年次教育として、全学必修科目の「キャリアデザインⅠ」が存在する。これは高校までの学修が、生徒たちにとって教員主導の教育を受動的に学ぶことに対し、大学の初年次の学生は、自己の人的成長を積み重ねていくために、先ず、学内で自らが主体的に授業に取り組み、そして、学外においても学生個人の自主性が問われる様々な経験を行うべきであるからである。さらに、このように能動的にキャリア教育を学修すべき事を自覚し、高校生から自立できる大学生へ自らが変化していかざるを得ない事について、スピリット・イノベーション（著者の造語：自己の意識改革）が必要とされるからである。

本学の必修科目「キャリアデザインⅠ」（経済学部）においては、文部科学省の助成金で作成した教科書を基本に、系統的にキャリア教育を学修し、そして授業目標の成果を上げるために、並びに、学生のモチベーション高揚のために、対話形式、事例研究、質疑応答、WORKに基づくプレゼンテーション、グループディスカッション等を積極的に導入している。その結果、同科目を履修しているほぼ全員の学生が授業を通じて、自己の学修への取り組みが、受動的なものから能動的なものへ変化していくことを実感し、さらに、自己の将来像を目標に、「Time is Money」（時は金なり）の諺の如く、時間が有限の大学時代、様々な事に挑戦していく姿勢を身につける事が、近い将来、一人前の社会人に成長していくためにはどうしても欠かすことができないと、自己を肯定している。

上述の事柄は、本学の平成 28 年度前期定期試験（以下、H28 前期定期試験）で、「キャリアデザインⅠ」（経済学部）を受験した初年次の学生（235 名）の答案からも検証できる。この授業目標の成果が問われる定期試験の結果から、初年次の 4 月、5 月、6 月、7 月は、その後の大学生活を充実させる事ができるか否かを左右する、岐路ともいえる最も重要な期間であることが分かる。この期間中に自己の将来像の夢・目標に向かって、自分が成し遂げたい一つ一つの小さな目標に、PDCA サイクルを好循環させ自ら挑戦していく「自分を創る」ことができるかどうか、将来、一人前の社会人としての資質を備える事に直

接つながらののだということ、しっかりと自覚できたことが大勢の初年次の学生の、この答案に記載されている。

この事実が、「大学生のためのキャリア教育の社会的意義」の証左につながるものと判断している。

キーワード：スピリット・イノベーション(自己の意識改革)、キャリアデザイン(人生設計)、主体的・能動的キャリアデザイン、自己の将来像への夢・目標、経済学とキャリア教育、キャリア・カウンセリング、大学の「全入時代」と経済・社会の「グローバル化」によるキャリア教育

1. はじめに

現在、日本社会では18歳人口の減少とともに、2008年春に「大学全入時代」が到来し、大学・短期大学に進学する高校卒業者が二人に一人を超えている。「全入時代の到来」に伴い、まじめ化、高校生化(生徒化)、学力低下など学生のさまざまな変化・多様化が顕在化してきた。一方、ベンチャー企業などを企業化し、上場を目指す学生、ボランティア活動で指導力を発揮する学生など、以前とは異なるタイプの“原石”も輝きだしている。これらが「全入時代の学生像」といえる。

「誰でも入れる時代」は学生の質を変え、否応でも大学にも変革を迫ることになる。

この「全入時代の到来」に対する、時代の変化に関しての意識改革を、一人一人の教員が持てたとしたら、素晴らしい大学の姿が、そこに生まれると思う。その上で、「新しい学生像」にどのように接し、一人一人の学生の持ち味を尊重した、「学生の品質管理」をどのように実り豊かに培っていけるかが、これからの大学の優劣を決めていく、大きなモノサシになってくるものと思う。¹

本論文では、時代の変化とともに「生き方」や価値観の多様化している学生に対し、大学側がどのようなキャリア教育を行う事が、自己の将来に夢・目標を掲げる動機づけになるのか、そして、その目標に近づくために各学生がPDCAサイクルを意識して、自己の将来像に向けてどのような科目を履修し、学内外でどのような活動に挑戦し続けることが、大学時代において自己の人間形成を豊かに成し遂げていく事につながるのかということの問題提起し、その処方箋について論じていきたい。

2. 「キャリアデザインⅠ」を受講する新しい学生像

上記の「新しい学生像」に関しては、本学のH28前期定期試験で、必修科目「キャリアデザインⅠ」(経済学部)を受験した初年次の学生(235名)の答案からも、明確に把握できる。

¹ 中村博(2008),「キャリア教育とスピリット・イノベーション」『福山大学経済学論集』第33巻第2号, p.81.

福山大学への入学理由としては、次の項目が挙げられる。

1. 中学・高校の教員、警察官、消防官、自治体職員になりたいので、教職課程や公務員対策講座もある経済学部で学修したい。
2. 地元有力銀行やその他金融機関に就職したいので、経済や金融について学びたい。
3. 将来の職業や進路については、まだ分からないが、在学中にできるだけ多くの資格を取りたい。
4. 自己の将来像についての夢・目標を、大学に入ってから探したい。
5. 現在、自分がやりたい事や興味が持てるものは見つかっていないので、大学で自分探しをしたい。
6. コミュニケーション能力に自信が無いので、学業以外にアルバイト、クラブ、サークル、ボランティア、インターンシップ等、さまざまな経験をして、その能力を磨きたい。

このような入学理由を持つ学生を前に、初回の授業で「キャリアデザイン」とはどのような意味か質問すると全員が答えられず、「キャリア」自体の意味も、ほとんどの学生が正確に答えられないのが現状である。すなわち、全員の学生が「キャリアデザイン」という初めて聞く名前の科目を受講しているのが実態である。

3. 大学で学ぶキャリア教育の社会的意義

初年次の学生達は、大学で何を学ぼうとしているのであろうか。通常、大学教育には教養教育と専門教育があるが、それでは近年声高にその必要性が高まってきているキャリア教育の存在意義とは何であろうか。

他学部と同様に、経済学部に入学者は、初年次から教養教育科目と専門教育科目を履修することになる。これらの科目は経済学部の教員が経済学部のカリキュラムとして創ったものであり、そこには一人一人の学生が入学以降、大学時代にどのようなキャリアデザイン（人生設計）の道を歩む事が、自己の将来像に向かって望ましいのかという、個別の学生が抱える事情とは、何らの接点・関係もできていないのである。

本学を含め大学が、どのような理想の建学の精神や精緻な教育プログラムを用意しても、それらが自己のキャリアデザインにとって、どのような意味をもたらすのか、それぞれの学生が自分自身で納得できなければ、自己の人生設計への目的意識もなく、ただ初期の教員によるオリエンテーションやガイダンスに従い、受動的に科目の履修選択を行うことになりかねないのである。

ここに第三の教育とも言えるキャリア教育の社会的意義が生じてくる。²

² 寿山泰二ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房, p.2.

4. 大学教育の目的は、社会への進路実現を図ること

H28 前期定期試験の「キャリアデザインⅠ」の答案に、経済学部1年生が今後3～4年の大学生活でどのような活動に取り組み、どのような目標に挑戦したいのかが多様に記載されている。

- ① キャリアデザインⅠの授業を受講した結果、高校時代の消極的な自分から、自分が劇的に変化した事もあり、大学4年間を充実させるために、日々の生活に目的意識を持って、PDCAサイクルを効果的に使い、現在、学業やその他の活動に目標を創り、イキイキとしている自分自身を発見できたことが嬉しい。
- ② 卒業後は、周囲の期待もあり、地元金融機関に就職したいので、就職に有利な資格を取得し、経済・金融関連の専門知識を身につけ、お金に関する仕事を通して、地域経済に貢献したい。
- ③ 警察官、消防官、教員、自治体職員等の公務員になりたいので、試験に合格するための関連科目を積極的に履修し、地方公務員という自己の将来の職業を通じて、これまで自分を育ててくれた地域社会に恩返ししたい。
- ④ まだ大学で何をしたいのか、将来どういう職業に就きたいのか、見えていない。でも、キャリアデザインⅠの授業で、「自分を知る」「社会を知る」「そして、自分と社会の接点を知る」事を学んだので、クラブ・サークル・ボランティア・インターンシップ・アルバイトなどのいずれかを経験することで、一步踏み出す自分探しをしたい。
- ⑤ どのような職業にもコミュニケーション能力は必要となる。しかし、自分にはこの能力がまだまだ不足しており、自信がないので、大学や学外で様々な人々と出会う機会をつくり、授業で学修した「傾聴」「聞き上手は話し上手」等を尊重し、日頃から自己のコミュニケーション能力を磨くことに傾注したい。そのためには、授業で行うグループディスカッションへの参加や、アルバイトの経験等も有効である。
- ⑥ 授業を通して、自己の将来像に夢・目標を持つ事が肝要である事を納得できたので、これまで何の目的意識も持たずに無意味に生活していた自分を振り返って反省し、「Time is Money」（時は金なり）の諺の如く、大学4年間の貴重な有限時間の中で、1年次～4年次までの間、各学年末までの目標を設定し、PDCAサイクルを好循環させ、小さな事から目標を達成できるように、階段を上っていききたい。そして、様々な事に挑戦していききたい。

以上のように、大学初年次生の学生の答案からは、彼らが「キャリアデザインⅠ」の授業を受けた結果、大勢の学生が高校生のときから大学に入学したばかりの自分を振り返り、自分自身の自己の将来像への目的意識の欠如、これまでただ漫然と日々を送ってきたことへの反省、大学で本質的に何を学び、何を身につける事が、自己の卒業後の職業に活かせることにつながるのかという論理的思考力が不足していた事などに、彼ら自身が気づき、その結果、これまでの自分を新しい自分へなんとしても変化させなければいけないという、自己の意識改革を是非成し遂げようとする強い向上心が生まれてきたことを、彼ら自身が自ら自覚できたことが感じ取れる。

5. 入学後の4か月が大学時代・社会進出を左右する

H28 前期定期試験の「キャリアデザインⅠ」の答案から、大学に入学したばかりの初年次生の学生間において、自己の将来像に向かった志の高さの度合いに、かなりの格差（希望格差にも相当）が見られる。

- ① 自己の将来像（なりたい自分・就きたい職業）が明確に見えており、大学時代に資格取得を含め、どのような専門知識、スキル、コミュニケーション能力などを磨けばいいのか、その道筋や方法が、具体的にイメージでき、PDCA サイクルを有効に使う事の出来る学生
- ② 自己の将来像はまだ具体的に見つかっていないが、将来一人前の社会人になるためには、大学時代に何をすべきか理解しており、現在、様々な活動から、なりたい自分を積極的に探している学生
- ③ 自己の将来像は見つかっておらず、不安も抱えているが、前向きに自己を肯定し、できる事から始め、大学生活の中で時間をかけて自分探しをしたい学生

このように、初年次の学生間においてかなりの志の格差が見られるが、大切な事は、ほとんどの初年次の学生が、「キャリアデザインⅠ」の授業を通して、卒業後に一人前の社会人になるためには、「今の自分」から「なりたい自分」（自己の将来像）への夢・目標を見つけ、その将来の目標に近づくための道筋を、自分自身で主体的に考える事が肝要である事に気付いたことである。

このような貴重な自己理解への道筋は、入学後の4月、5月、6月、7月の「キャリアデザインⅠ」の授業において学修したことであり、この4か月間のキャリア教育の授業の期間については、その授業内容の本質を真に自己理解でき、そして、どの程度自分自身のために身につける事が出来たか否かが、それ以降の大学生活、卒業後の社会生活を実り豊かにする事が出来るか否かを左右する岐路に相当する、極めて重要な期間であるといえよう。

6. 入学生は、主体性を育み教師との一体感を持てる授業に感動する

福山大学では、入学生を対象とする必修科目「キャリアデザインⅠ」の授業で、文部科学省の助成金で作成した教科書「Career Design Note Ⅰ－Fukuyama University－」を活用している。この指定教科書の中身は次のとおりである。

- 第1回 キャリアデザインとは？
- 第2回 大学4年間をイメージする
- 第3回 大学と社会のつながりを意識しよう
- 第4回 自分の学びのスタイルを意識しよう
- 第5回 社会で役立つ大学の学び 基礎編1
- 第6回 社会で役立つ大学の学び 基礎編2

大学生のためのキャリア教育の社会的意義

第7回 社会で役立つ大学の学び 実践編1

第8回 社会で役立つ大学の学び 実践編2

第9回 自分を知る：自分を理解しよう

第10回 自分を知る：自分の強みを知ろう

第11回 社会を知る

第12回 目標設定と行動計画

第13回 自分の将来について考える

資料編1 職種研究

資料編2 業界研究³

科目名「キャリアデザインⅠ」の意味を全く知らない入学生全員にとって、初回の当該授業においては、教員が何を教え、自分達は何を学ぶのか、期待と不安で教室はまさに興味津津の雰囲気包まれている。そこで「キャリア」の語源がラテン語で轍を意味し、例えば中世ヨーロッパの王様の馬車が道を走った後の車輪の跡、すなわち人間の人生の足跡、自分の「生き方」である事を物語ると、真摯に聞いている入学生全員と担当教員との間で、授業の進行について一体感が感じられる。

そして、入学したばかりの1年生に対して、これからの「生き方」を自ら考え、自己の「キャリアデザイン（人生設計）」をどのように創るのかは、一人一人の学生が高校生までの自分とは意識を変え、勇気を持って主体的に自己の人生の扉を開く事が大切であると、啓発している。

さらに、教科書の記載内容として第1回～第13回にはWORKがあり、入学生はこれからの大学4年間を通じて、自己のキャリア構築をどのように進めるのか、主体的に自分で考え、積極的に自分でそのWORKに記載し、皆の前で発表できる能力を培っていく事になる。

7. グループディスカッションで学生の主体性・積極性・社会性を啓蒙

自己の主体性を磨き、人前で自分の意見を明確に表現し、他者と建設的に議論することで、コミュニケーション能力を伸ばすためには、グループディスカッションがとても有効である。アメリカ合衆国においては、中学生の頃から、ディベート（討論）を授業に取り入れ、自分の意見を複数の他者にしっかりと伝え、他者の意見も聴き、お互いの考えについて異なる点や共感できる点を把握し、討論することで、コミュニケーション能力を確実に身につけている。人種・言語・文化・宗教・生活が異なる多民族国家の国では、欠かすことのできないものといえる。

福山大学の「キャリアデザインⅠ」（経済学部）の授業で、「なぜ積極的にグループディスカッションを講義に取り入れているか」は、次の理由からである。

³ 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note I Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター, p.1.

1. まず、「イザ」というとき、人前で喋ることのできない、自分の姿に気付いてほしいからである。
2. グループの中に、自分の意見をしっかりと話せる学生がいたら、その他の学生達が自分自身の至らなさ、弱点に気づき、その事をバネにして、「どうしたら表現力が身に着くか」、と真摯に考え始めることであろう。
3. この出来事が、学生個人の潜在意識に眠っていた、「学び」への意欲を引き出し、他の学生に負けたくないという気持ちを奮い起し、講義への取り組み姿勢も、真剣さを増してくることであろう。
4. そして、仮にテーマを「社会から求められる人材になるためには、大学生活においてどのような『学び』が必要なのか」として与えれば、否応なく、自己の将来像や大学における「学び」について、しっかりと考える「きっかけ」になるであろう。
5. さらに、グループディスカッションは賛成派・反対派に分かれ、討論を競い、勝敗を意識するディベートとは異なる。また、就職活動においてグループディスカッションは、個人面接や集団面接では把握できない学生個人の「対人能力」を、唯一企業側が評価することのできる手段である。それは、相手を受け入れる寛容さ、グループのメンバーと協調しながら建設的に議論し結論を導く事、グループのメンバー同士の一体感、リーダーシップなどの「人間力」（社会人基礎力を含む）を、切磋琢磨に磨くことにふさわしいからである。⁴

事実、H28 前期定期試験の答案にも、「キャリアデザイン I」の授業中に、受講生全員の前でグループディスカッションの模範演技を披露した選抜されたチームに、「勇気を出して自分も参加したかった」「次回、同様の機会があれば、自分も是非参加したい」という、後悔の念を記述している多数の学生がいた。勿論、模範的グループディスカッションを披露した学生の面々の中には、大きな学びと達成感を得た事に満足している者が多い。

8. キャリア教育の範囲：大学で学修する経済学とキャリア教育

大学で受講する経済学とキャリア教育には、どのような接点があるのだろうか。経済学は個人、企業、政府などで構成される人間社会を本質的に考察する学問であるが、それぞれの学生と直接の関係はない。一方、キャリア教育は正面から学生に対し、自己理解・社会理解を促し、一人一人の学生を成長させていく学問である。両者は車の両輪ともいえる関係である。

社会科学の一つである経済学は、社会における様々な事態の要因を考察し、その本質まで客観的に直視できる体系を持つ学問である。事態を認識する客観性、論理的思考力、整合性、公開性、発展性、社会性といったこの経済学の社会科学性を、まだ学問的体系が整っていないキャリア教

⁴ 中村博(2008),「キャリア教育とスピリット・イノベーション」『福山大学経済学論集』第33巻第2号, pp.4-5.

育に、取り入れることにより、当該学問の独断性、孤立性、不透明性などを回避する事が可能と思う。

そして消費者・生産者に関する教育の視点から、「賢い消費者」を意識する事は、キャリア教育を受講する学生にとっても有益である。環境問題、食糧不足の問題に関して、包装紙の節約、ゴミの分別回収、産地直送、色・形状にとられない野菜・果物の選択など、「賢い消費者」の立場を意識する事は、広い視野と知恵を育み、人間を成長させてくれる。

また、会計（簿記）や金銭に関する教育も、学生の自己のキャリア形成を豊かにしてくれる。会計（簿記）や金銭についての知識は、単に数値管理の能力にとどまらず、お金や資源の無駄遣いを省き、大学生生活に合理的な思考力をもたらしてくれる。

金融学や財政学を学ぶ教育についても、学生達が自己の生活設計をするうえで、銀行や保険の知識は生活保障の観点から欠かすことはできない。また国や地方自治体の財政についても、学生達にとってはその財源を担う納税者の立場から、生涯必要となる学問である。

さらに、現代社会の秩序は法律により維持されており、経済社会についても、法律の知識がなければ拝金主義や犯罪に陥る危険性が生じる。自己の就職活動、企業の経済活動などについても、労働や経済に関する法律が必要となる。

経済倫理の崩壊についても、ニュースで報道される事例を分析し、どのような処方箋をもって対処すれば、同様の事件の繰返しを未然に防ぐ事が出来るのか、本質的なところを経済学の教育で学修する事が、学生のこれからのキャリア教育において、「人間力」（社会人基礎力を含む）の育成につながる本質的なキャリア形成と言えよう。⁵

9. 主体性を積極的に引き出すキャリア・カウンセリング

キャリア・カウンセリングの社会的意義は、クライアントである学生に単なる職業の斡旋・紹介や、テクニカル就職支援を行うことではない。クライアントの学生が抱えている現在の不安や悩み、そして、これまでの境遇などに対し、「傾聴」の姿勢をもって相手の心に寄り添う形で、まずは相手の学生を全面的に受け入れ、親身になって相談に乗ってあげることで、そこに芽生えるお互いのラ・ポール（信頼）に基づき、クライアント（学生）の主体性を積極的に引き出すことにある。

これからのライフ・キャリアについて不安を抱く学生達は、併せて、さまざまな精神的悩みを抱えている。故に、キャリア・カウンセリングの過程においても、このような「メンタル面のケア、心理的問題の解消へのサポート」は、クライアント（学生）との信頼関係を築く上で、核心的事柄として位置づけられる。

⁵ 寿山泰二ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房, pp.26-29.

成熟社会・飽食時代に育った、現在の日本の大学生に見られる、主体性・積極性・自立性の欠如、社会が求める人材とのミス・マッチ、自己の将来や人間関係への不安などについて、「個」を大切にするキャリア・カウンセリングの手法を、講義やゼミ授業を通じてのキャリア教育と融合させ、双方の相乗効果を活かす形で、その効果を将来自立できる学生への成長につなげる事が、このような諸問題の解決につながり、また、日本社会が求める、将来の社会の一員としての自覚や責任を担える学生を、世に送り出すことに資することになるといえよう。

一方、高等教育においては、大学設置基準法が改正され、平成 23 年度から大学教育の一環として「社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）」が実施されることになった。これは、学校教育の最後の砦ともいえる大学において、授業やその他の各種支援を通じ、将来の社会の一員としての自覚や責任を、学生一人一人が自ら担えることを大学教育に求めるものであるといえる。

この大学に求められる社会的役割を全うするには、一人一人の学生の主体性を引き出すことが肝要であり、そのためには入学の早い時期から将来の社会進出・職業を意識した自らの積極的姿勢、計画性、行動力を、大学時代に身につける事がとても大切な精神的支柱となる。⁶

10. キャリア教育とキャリア・カウンセリングの相乗効果

近年、若年のフリーター、ひきこもり、失業者、非正規雇用者などの増加にみられる、先行き不透明な現代社会において、大学生を含む若者の社会への関心はますます薄れていく傾向にある。この背景には、親への依存の長期化、若者の社会的自立の遅れもある。さらに、進路葛藤に関する青年期のモラトリアム（猶予期間）や若者の社会的孤立、職業への疑問、社会への不応と健康障害なども影響している。

カウンセリングと教育の共通点は、個人の育成・成長をはかる視点である。しかし、カウンセリングの目標は個人の人格を尊重し、個人を人間的に成長させることを目標にしていることに對し、教育は個人が社会人・組織人として育つことを目標にしており、要は卒業後、社会に適應できる能力を身につけるための社会化が、大学を含む学校教育における目標である。さらに、カウンセリングにおいては主に情動面に働きかけ、気付きを大切にするが、教育においては主に知的な面に働きかけることを重視する。

このようなことから、現代の大学生のためのキャリア教育については、キャリア・カウンセリングの手法を駆使し、「個」を最大限に尊重するそのメリットを、教員が一人一人の学生に対する接し方として、積極的に授業の進行・個別面談などに取り入れることが大切である。大学においてキャリア教育の授業を通じた理論的・学問的領域の学修を行う際、大勢の学生に当該授業に関

⁶ 中村博(2011),「主体性を引き出すキャリア・カウンセリングと大学におけるキャリア教育」『福山大学経済学論集』第 36 巻第 1 号, pp.1-2.

心を持ってもらうために、「個」を大切にすることが、キャリア・カウンセリングのそのメリットを、一人一人の学生の人間的成長に反映させることが、キャリア教育についての本質的な教育上の成果を高めることにつながるであろう。また、この事が、現代社会で最も問題・課題になっている大学生の自己の将来像に対する意欲・向上心を、どのようにしたら高めることができるのかという問いに、答えることにつながるといえよう。⁷

11. 自己の人生と真摯に向き合うための大学のキャリア教育

現在の日本の大学生の中には、将来の日本社会に夢や希望を抱けず、また自分自身の目標も持たず、自己を向上させようという意欲が欠けている若者が多い。これは時代が大きく変わり、若者の価値観の変化に無頓着であった、大人たちにも大きな責任があると考えられる。

若者の価値観の変化に気付かず、親や、教師の考え方や価値観を一方的に押し付けていることがあるとすれば、若い世代はますます自分だけの世界に閉じこもっていく傾向が見られる。

もし、大学卒業後、3年以内に会社を辞めて、フリーターやニートになったとしたら、20歳前後から30歳前後までの間で、本来若者が身につけるべき、社会に適応するための基本的な思考力、そして幅広い社会体験に基づく判断力、さらに職業的能力までも、自分で培う貴重な機会が失われることになる。

このように日本の未来を担う若者が、社会への進出に不安を抱え、自分の進路に迷っている状況を打開するために、まず、自分はどういう特徴を持った人間であるか、自ら考えることが大切である事に気付かせ、そして、自分の好きなこと、長所、得意なものは何かなど、自己理解を促すことが、キャリア教育の原点になる。そして、教師の立場からは、学生一人一人の他の学生に見られない、持ち味や隠れた資質を発見してあげるための教育・支援を行い、見つかった優れた個人の資質を、まず、十分に褒めてあげることから指導を始め、その学生の目が輝きだすことで、学生と一緒に嬉しくなる気持ちを分かち合う事が、お互いの信頼を築いていく、大事なステップである。

すなわち、学生一人一人が、自分の人生に真摯に向き合うための、動機づけのキャリア教育が必要である。そして、「10年後に自分はどういう仕事をやり、どういう人になりたい」という、夢や希望を抱かせ、それを実現していくための道として、大学で学んでいる科目が、将来どういう形で、自分を成長させることに役立つのか教えてあげる事が、それぞれの教育現場において、今、求められているのだと思う。

従って、最初に学生達にとって、自分の将来像への潜在的意欲を引き出すためのキャリア教育があり、その後、自分の進路や将来への明確な目標を持つ事の大切さを、自ら、気付かせるた

⁷ 中村博(2011),「主体性を引き出すキャリア・カウンセリングと大学におけるキャリア教育」『福山大学経済学論集』第36巻第1号, pp.10-11.

めのキャリア教育があり、さらに、家族・学校・地域社会との触れ合いが、一人一人の学生にとって、総合的バランスのとれた人間形成を目指すうえで、どういう意味をもたらすのか、「生き方」を教えるキャリア教育が存在すると考える。⁸

12. 必修「キャリアデザインⅠ」（経済学部）で入学生は何を学ぶのか

ここで、本学の H28 前期定期試験で、「キャリアデザインⅠ」（経済学部）を受験した初年次の学生の中から、一例として女子学生 T 氏の答案を紹介したい。

以下、引用文

「私は、中村先生のキャリアデザインⅠの講義で多くのことを学びました。まず、キャリアデザインとは、「なりたい自分（目標）」と「今の自分（現状）」を正しく認識し、「現状」から「目標」にたどりつくための道筋や手段を考えていくという意味を初めて知り、大学に入ってから初めて学びました。また、キャリアデザインには3つのステップがあり、第1ステップは、「今の自分」を把握すること、第2ステップは、「なりたい自分」を見つけること、第3ステップは、現状から目標への手段を見つけ、道筋を設計することということも学びました。さらに、PDCA サイクルの大切さも学びました。PはPlanで計画、DはDoで実行、CはCheckで点検、AはActionで改善というこのサイクルは、思考力と行動力を身につけると聞き、とても重要なことなのだということを知りました。他にも先生にはレポートの書き方やグループディスカッションの仕方、自分の性格や興味を社会に生かす方法、傾聴の姿勢や社会で求められる人材など様々なことを学び、教えていただきました。

私は中村先生の講義を受けるまで、将来の夢や自分のことも周りに合わせるような受け身の姿勢をとっていました。自分が自発的にならなくても、そのうちなんとかなるだろうとも思っていました。ですが、先生の講義を受けさせていただいて、大学は自由で、受け身の姿勢では自立せず、「自分で考える力」を鍛えられないことを知りました。その時、私は親に高いお金まで払わせて一体何をしに大学に来ているんだろうと思いました。どうせ大学で同じお金を払っているなら今という時間を大切に、大学の学問を余すところなく全てむさぼりつくそうと、この時から自分を変える決心ができました。そこから、まず自分の将来の夢について考えてみました。

入学当初は公務員を目指していました。ですが、先生の講義を受けて自分は企業で働く方が性格的に合っていることを知りました。また、先生がよくおっしゃっていた女性の労働問題をずっと聞いているうちに、自分がこの問題を解決したいという欲望が出てきました。そうすると、自分は企業の中でも発言力がある管理職に就きたいと考えるようになりました。そこから色々な人の話を聞き、私は銀行員という職に興味を持ちました。そして、その中でも大企業の銀行に勤め、

⁸ 中村博(2008),「キャリア教育とスピリット・イノベーション」『福山大学経済学論集』第33巻第2号, pp.2-3.

管理職になり、女性の労働問題の解決の重要人物になるというのが、今の私の目標です。この目標を達成するには、まず簿記などの資格をたくさん取得し、新聞やニュースから知識を蓄え、発言の質や知識も高めながら、多くの人脈をもつことが重要だと考えました。そこで、早速私は前期の間に2つの資格を取得することに成功しました。

さらに、私は自分を積極的に変えなければならないということをグループディスカッションで知りました。このグループディスカッションでは、自分の不がいなさを改めて思い知りました。発言力を持ちたいと言いながら自分はこの間のグループディスカッションで、緊張してしまい、自分の本気の50%も出せませんでした。なので、先生が前に講義でおっしゃっていた人前で話せない自分の姿を改めて思い知りました。そこから、私の弱点は本番に弱いということが分かりました。なので、今後はこんな自分を変えるために日頃からイメージトレーニングをして、不測の時でもすぐに対応できる臨機応変な態度を身につけていけるよう努力してまいります。

私はこのキャリアデザインという講義で、劇的に変化することができました。もしこの講義を受けていなければ、私はいつまでも受け身の姿勢のままだったと思います。目標が決まると、自分の行動が明確になるので、周りの人から変わったといわれることが多くなりました。先生のおかげです。本当にありがとうございます。これからは自分の目標に向かって失敗してもくじけずあきらめず、先生のことを思い出して頑張っていきます。全ての失敗を自分の経歴に変えて自分の目標を達成するために、小さな目標からコツコツと達成させてみせます。

先生、私をここまで変えてくださりありがとうございました。初めは嫌で嫌でしょうがなかった福山大学でしたが、色々な先生に会って自分の価値観は大きく変わりました。特に中村先生のお話が自分を変える大きな要因だと思います。先生の事を信じ、これからはたくさんの方にチャレンジしていきます。本当にありがとうございました。」(引用文終了)

13. 何故、今、多くの大学が「キャリア教育」に傾注するのか

そのひとつは、本論文の「1. はじめに」で述べたように、現在、高校卒業後、大学・短期大学への進学率は50%を超え、大学は「全入時代」を迎えている事が挙げられる。しかし、これは「全入時代」の大学への入学生が、高い向学心や志、そして目的意識や行動力を備えて進学してきたとは言い切れないのである。ここに「全入時代」を迎えた日本の大学教育についての課題が浮上してきたといえる。日本社会の少子高齢化、人口減少、特に18歳人口の減少に直面している日本の大学は、「生き残り」をかけて、入学者の増加に熾烈な競争を展開している。この影響もあり、大学は入学してくる学生の「生き方」や価値観の多様化に直面し、学力格差や希望格差、夢・目標の欠如、主体性・協調性・自立心の欠如などに、どのように対処したらいいのか善処できず、これが喫緊の課題になっている。

もう一つは、日本の政治・経済・社会が「グローバル化」へ一段と加速していることである。グロー

バル化への歩みは、大学生の「生き方」や「価値観」に大きな影響を与え、企業経営者や社員の既成概念、雇用マーケットなどにも大きな変化をもたらしている。

このように「全入時代」の日本の大学を取り巻く環境・世界は、情報通信革命ともいえる、地球が想像を超えるスピードで変化していくグローバル社会であり、この21世紀のグローバル社会が大学生に求める「生きる力」は、まさに目まぐるしい変化と多様性に適応できる能力、他者と価値観を共有できる寛容さと柔軟性、そして、他者との協働性、さらに、「個」の「生き方」を大事にする自律的能力といえよう。

14. おわりに

21世紀に入り、日本の経済社会においては、知識労働者の存在感がますます重要性を増している。社会が高度に成長した日本社会においては、グローバル化への熾烈な国際間の競争の中で、先駆的な知識・技術が、日本の将来を左右する、まさに国家的課題である。

知識社会の中核といえる「知識」は高度に専門化・細分化され、そして、非常に変動制・流動性の高いものになってきている。さらに、知識労働者として求められる技術・スキルは、情報通信革命といわれる現代において、目まぐるしく進歩する「情報」の変化に応じて、絶え間なく形を変え進化し続けなければならず、いったん習得できても、それで終止するものではない。⁹

また日本の企業社会は、日本経済の成熟化や労働人口減少の影響で、従来のように組織内の序列を昇ることだけを念頭に置けば、企業も個人も成長しない状況に陥るリスクが生じる。組織と個人が一体感をもって、多様なキャリア・アップへの企業内環境整備を始めなければ、企業の盛衰にも影響を与える時代が到来している。

このような社会の移行期に日本の大学生に求められることは、近い将来の知的社会人を目指し、大学における学びを通して、豊かな知識を身につけ、技術力を高めるためのスキルアップを常に怠らないことが大切である。すなわち、卒業後の自己の未来を切り開くために、そして、豊かな人間形成へのキャリア構築のために、学生個人のイノベーションともいえる「スピリット・イノベーション」(自己の意識改革)が肝要である。¹⁰

参考文献

- [1] 中村博(2008),「キャリア教育とスピリット・イノベーション」『福山大学経済学論集』第33巻第2号.
- [2] 寿山泰二ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver. 2』北大路書房.
- [3] 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note I Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター.

⁹ ピーター・F・ドラッカー(2010),『ドラッカー最後の言葉』講談社, pp.51-58.

¹⁰ 中村博(2013),「キャリア教育とキャリア・マネジメント、及び、日本経済における経営・組織論」『福山大学経済学論集』第37巻第1・第2合併号, pp.47-48.

大学生のためのキャリア教育の社会的意義

- [4] 中村博 (2011), 「主体性を引き出すキャリア・カウンセリングと大学におけるキャリア教育」『福山大学経済学論集』第 36 巻第 1 号.
- [5] ピーター・F・ドラッカー (2010), 『ドラッカー最後の言葉』講談社.
- [6] 中村博 (2013), 「キャリア教育とキャリア・マネジメント、及び、日本経済における経営・組織論」『福山大学経済学論集』第 37 巻第 1・第 2 合併号.

The Social Significance of Career-Education for The Sake of University Students

Hiroshi Nakamura

Abstract

Why is it necessary for university students to study Career-Education now?

What kinds of Career-Design is necessary for university students to make at university in order to become independent and be active in society after their graduation from university? I want to raise these questions and argue the solution of these problems in my opinion.

There is a compulsory subject for students entered Fukuyama University, named “Career Design I”. This means followings. Regarding studies by the end of senior high school, pupils are passively educated by teachers. However, with regard to freshmen of Fukuyama University, in order to achieve human growth step by step, they should subjectively take a lesson at university and they should experience various hardships requiring independence of each student everywhere, except university.

Furthermore they should realize that in this way they actively learn Career-Education and that in order to change from a high school student to a independent university student in person, “Sprit Innovation” (Author’s coined word : Consciousness Innovation) is necessary.

In the class of a compulsory subject of “Career Design I”, students of Fukuyama University systematically learn the contents of a designated textbook made by Fukuyama University with subsidies from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Also to obtain good results of the teaching-aim and to raise students’ motivation, dialogue, case study, questions and answers, presentation based on Work of the textbook, and group discussion are positively introduced.

As a result almost all students feel actually that their attitude of mind toward learning is going to be changed from passive one to active one. Furthermore they realize for their own selves that it is necessary by all means for them to acquire such attitude as challenging various things during limited time of university days as the proverb that time is money in order to grow into an independent adult socially in the near future.

The above-mentioned matter can be verified by the examination papers of 235 freshmen of Fukuyama University who took an examination of the required subject of “Career Design I” during the first semester examination in 2016 of Fukuyama University. From the result of this examination inquiring good results of the subject-aim of “Career Design I”, we can understand that April, May, June and July of freshmen’s first year are the most important terms influencing whether or not remaining university life is fruitful as

大学生のためのキャリア教育の社会的意義

crossroads.

With the above-mentioned examination papers we can also understand that these freshmen of Fukuyama University could firmly realize for their own selves that during this period it is most important for them to make oneself who can challenge each small goal making the best use of PDCA- cycle toward their dreams and aims in future in order to become an independent member of society.

With these facts it is evident that Career-Education for The Sake of University Students is Significant Socially.